

前1千年紀の民衆の生活

—エジプト・アコリス遺跡の調査2024—

花坂 哲 東京都立大学客員研究員
川西 宏幸 筑波大学名誉教授
辻村 純代 古代学協会客員研究員

Life of the Non-elite in the First Millennium BC: Akoris Archaeological Project 2024

HANASAKA, Tetsu Visiting Researcher, Tokyo Metropolitan University
KAWANISHI, Hiroyuki Professor Emeritus, University of Tsukuba
TSUJIMURA, Sumiyo Visiting Researcher, The Paleological Association of Japan, Inc.

前1千年紀の民衆の生活—エジプト・アコリス遺跡の調査2024—

1. はじめに

アコリス遺跡はカイロから南へ約230 km、ナイル河東岸を南北に連なる段丘上に営まれ、東側から北側をワディが取り巻いている。独立峰状に聳える岩山の北裾には、中王国時代の岩掘墓が穿たれ、プトレマイオス朝期やローマ期にはそれを改変して神殿が建立された(西方神殿域)。岩山の北方には、ローマ・コプト期の日乾レンガ製の建物群址が地表面に露出しており、15ヘクタールほどの「都市域」を形成している(図1)。しかし、岩山の南側(南区)の集落址の発掘調査によって、第3中間期おそらくは新王国時代末期にはすでに密集集落としての体裁を整えていたことが推察される。その集落も第3中間期後半には過疎化し、次第に墓域や放牧地に転じていった。

南区の過疎化に合わせて、主要な居住域は岩山北側の「都市域」に移っていった。遺跡近傍では、現在、

数多くの石灰岩の採石場が稼働しているが、操業を始めた時期は定かでない。しかし、遅くともプトレマイオス朝期には活況を呈し、ローマ期にかけてアコリスの経済活動の主柱であったことは、我われの調査が確認している。

2023年度はセキュリティ部門の許可が下りず、調査を実施できなかった。2024年度の調査は2024年8月上旬から2024年9月上旬にかけて、南区の南西端区域では集落址の発掘調査、採石場では書き付けの調査、ワニのミイラが納められているチャペルEの清掃および3次元測量調査を実施した。

2. 南区 南西端区域

遺跡南端に位置する南区は、河岸段丘が途切れた鞍部と、その南北に緩やかに上がる斜面からなる。2024年度の調査区域は南に上る斜面の南西端である(図2)。今年度は、これまでの調査を継続する形で下層の遺構



図1 岩山北側の都市域(北から)。



図2 2024年度の調査区遠景(北から)。



図3 24東区の東西壁A(北から)。

検出を目指し、層位確認用に残しているセクションベルトの東側と西側の2か所(24東区と24西区)で発掘調査を実施した。24東区は、セクションベルトと東方既掘住居西壁との間、東西7.5m×南北10.7mほどの長方形の区画であり、24西区は、セクションベルトと西方既掘住居東壁に挟まれた、東西3.4m×南北11.0mほどの細長い区画である。

層序関係、土器編年、日乾レンガサイズなどを勘案すると、南区南西端域の活動時期は大きく4期に分けることができる。すなわち、南区の集落が過疎化し、墓域となったのが最上層で、これをI期。順次下層に、2017・2018年度に検出した岩盤沿いの部屋群をII期、2019年度に検出した下層の日乾レンガ列をIII期とする。そうすると、さらに下層の、西区検出の日乾レンガ列はIV期に相当する。今年度は、このIV期の日乾レンガ列が東方に延伸することを確認するのが、目的のひとつである。

24東区は2010年度に表土を除去して以来、2012、2015、2016、2022年度に少しずつ掘り下げてきた。ところが、墓址は数多いが、日乾レンガ壁は検出されなかった。これは24西区も同様であり、他区と異なる24東・西区の特色はこの点にある。その一方、最大2mに達し、土と灰の互層からなる厚い堆積層は、亜麻の糸玉や糸くず、撚りを掛ける前の亜麻植物の束、木製紡錘車を大量に含んでいる。また、未焼成の大型土製ルームウエイトや毛織物片も検出される。これらの種類と量は、24東・西区ないし近傍に、亜麻の製糸・織物工房が存在したことを強く示唆する。遺物のなかに毛織物も少量含まれるので、工房は毛織物も扱っていた可能性があり、少数ながら鋳銅用の坩堝や羽口も見られることは、小規模な鋳銅生産の場でもあったことを推測させる。野外の工房ないし工房屑の

廃棄場ならば、住居址検出の他区よりも土器の量が少なく、生活臭に乏しいことも頷ける。

さて、IV期の日乾レンガ列であるが、24東区で、東端の東方既掘住居西壁から発する2本が検出された。北寄りの1本は、数個の日乾レンガしか残っていないが、延展方向からみて、西区の西方既掘住居東壁の北端をなすL字屈曲部と結ばれる。これによって、広い囲壁空間の北壁にあたることが察せられる。南寄りのもう1本は、大きな攪乱坑をかすめ、石灰岩の大転石を跨ぎ、セクションベルトを潜って西区に延びる。これは広い囲壁空間の南壁にあたる。この空間は東西11.5m、南北5.0mを測る。

セクションベルトを潜って西区に出たところで、この東西壁から南の崖面まで延びる短壁が分枝するとともに、隅が出入口を構成し、それを隔てて同区の東西壁と結ばれる。こうして、北東隅に出入口を設け、3壁に囲まれた崖面際の空間は、東西2.6m×南北3.3mの小室を形成する。広い囲壁空間のさらに奥寄りの崖際に設けたこの1室は、床が家畜の屎尿で固まっていた。これは、小室が家畜小屋として使われていた可能性を示す。出入口や部屋の狭さからすると、出土動物骨の首位を占めるブタが収容家畜に相応しい。また、家屋の最奥に家畜小屋を設けるのは、今も村の通有の間取りであるから不思議でない。

以上、東・西端の南北壁はIII期に存続したのに対し、広い囲壁空間や家畜用奥室の隔壁は、IV期で廃絶し、次代から工房経営が始まった。

3. 24東区出土の墓

2024年度は24東区で2基の墓を検出した(24-G1と24-G2)。まず24-G1は、24東区の北端中央付近に位置し、東西1.5m×南北0.8m×深さ0.5mほどの浅い土坑墓である。東西軸に沿って、他のシコモアイチジク製大型木棺の一部を転用した、簡素な箱形木棺が置かれていた。大きさは、長さ1.42m×幅0.38m×高さ0.33mを測る。被葬者は身長約92cm、推定3歳ほどの女兒であり、頭位は東向きである(図4)。

副葬品は2点あり、1点は葦のような湿性植物を細く割いて編んだ、直径20.4cmの円形の製品であり、被葬者の胸上にあつた。太い帯状の赤と緑(または黒)の彩色が中央に残る。用途は定かでないが、すでに同様が4点出土している。もう1点は赤色彩色皮革を用いた、長さ16.5cmほどのクツである。こちらは木棺底板の下方、遺体の膝付近にあたる。なお、副葬品



図4 蓋を開けた時の24-G1。

の同じ組み合わせが、12～13歳の女性を人形木棺に納めた19-G2でも見られる。定式化していたのかもしれない。

この被葬者は、大きな亜麻布で包んであった。布は完形品で、長さ420 cm×幅122 cmを測る。長辺を二つ折りにし、遺体を右側に寄せて、左側の布で身体を覆うように包んでいた。また、枕のように頭の下に置いた布は、縦61 cm×横60 cmの正方形に近い形状の、貫頭衣風の衣服であった。

遺体の首には、ファイアンス製の護符を伴うネックレスが確認されたが、遺存状態が悪いため、詳細は明らかでない。また、興味深い点として、少量の人毛の塊を両腋の下と陰部近くの太腿の間に添えてあったことが挙げられる。遺体の毛髪は明るい金茶色であるのに対し、添えた人毛は黒色である。幼くして死亡した我が子が、来世で成人できるように、あるいは大人として来世に旅立てるように、親が置いたものだろうか。なお、遺体のCTスキャンおよびX線撮影をMinia Oncology Centerの協力のもと実施しているが、そこから得られた知見は改めて公表する。

もう1基の24-G2は、東西壁Aを遮る転石のすぐ北側で検出された。東西2.4 m×南北1.0 m×深さ1.2 mを測る土坑墓である。坑底は地山の岩盤直上まで達し、同地区出土の墓のなかでは最も深い。東側に位置する16-G6Bの墓坑によって切られている。これらの点で24G-2は、既掘墓の最古例にあたる。

墓坑に納めた木棺は箱形で、長さ190 cm×幅32 cmを測る。異例なほど細長い。腐朽して旧状が定かでないが、棺上に植物製の敷物が掛けられていたと思われる。蓋の有無は不明である。側板も木質がかるうじて確認できるのみで、全体像は不明である。棺幅が狭いため、遺体を仰向けに納めることができず、右

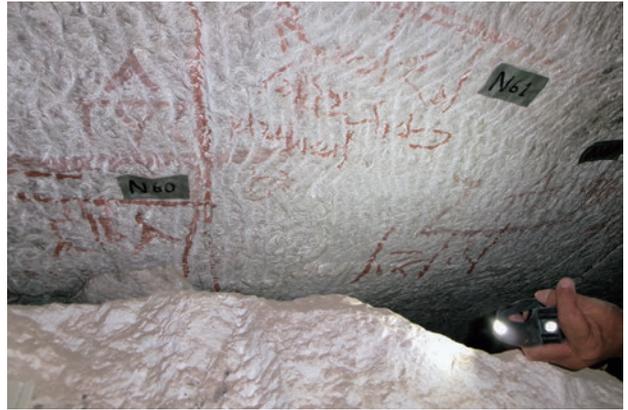


図5 壁面に残る書き付け。

肩を下にして、身体をひねるよう安置していた。骨の状態から、被葬者は身長160 cm、15～18歳と推定される。性別はなお検討中である。左手と右足が不自然に曲がっていることから、小児麻痺を患っていた可能性がある。

4. ニューメニア採石場址の調査

遺跡から15キロほど南方にあるニューメニア地区に近接して、大規模な石灰岩採石場址がある。約1 kmに亘って南北に細長い渓谷状を呈した景観となっており、谷の両側に露天掘りや横穴式による採石の痕が残る。それらの壁面には、ギリシア語とデモティックの二言語で併記された「治世年・月日」、「人名」、「3つの数字」で構成される書き付けが残っており、プトレマイオス2世から4世の治世に大規模な採掘が行われたことが明らかとなっている。2024年度は、谷の西側南端に位置するSection Nの調査を継続した。

Section Nは15 m×6 mほどの深い長方形の空間であり、大きなブロックAと小さなブロックBがあり、双方のブロックの下方には水平の溝が穿たれている。水平溝にはギリシア語とデモティックの書き付けが規則的に記されている(図5)。

Section Nの書き付けには2つの興味深い点がある。一つは、ギリシア語の書き付けでは、特定の期間を表すために英語のuntilにあたる語が使用されている一方で、デモティックの書き付けでは、連続した月の名で表現されている。同様の例は既に他の地点でも確認しているが、今年度の調査でこうした表現方法が頻繁に用いられていたことが裏付けられた。

もう一つは、金銭に関する単語が初めて発見されたことである。あるデモティックの書き付けには、おそ

らく「3obols」と読める単語が含まれている。これは1ドラクマの半分にあたるため、給料を表していると考えたくなるが、そうだとすれば、他の地点でも例があっても良い。この語についてはさらなる資料の増加と検討が必要となる。

5. チャペルEの清掃および 3次元測量調査

岩山北裾に残る西方神殿域の岩窟チャペルE(中王国時代)の奥室は、入口に鉄格子の扉を取り付けて、ワニのミイラの保管庫に転用してある。保管に至った経緯は分からないが、1900年代前半に同神殿域から出土したミイラで、ローマ時代にこれを神殿に奉納していたことを示す貴重な例である。

保管庫となった奥室は、南北3.9m×東西3.1mほどの長方形を呈し、室内の両側壁に沿ってワニのミイラ(片)を積み重ねてある(図6)。今年度の清掃作業により、それぞれ10体(点)ほどのミイラを置いたことが確認された。ただし、ミイラはいずれも破片であるため、総個体数は明らかでない。亜麻布やバンテージの破片、ミイラを覆うための湿性植物、太陽円盤を象った木製品片、先コプト時代の土器片など雑多な遺物が、室内で発見された。また、ミイラ処理を欠く子



図6 清掃作業完了後のチャペルE。

供のワニも、断片が25点以上を数えるので、奉納の対象になっていたらしい。

■参考文献

- ・ Kawanishi, H., S. Tsujimura and T. Hanasaka (eds.) 2023 *Preliminary Report Akoris 2022*.
- ・ Kawanishi, H., S. Tsujimura and T. Hanasaka (eds.) 2020 *Preliminary Report Akoris 2019*.
- ・ Kawanishi, H., S. Tsujimura and T. Hanasaka (eds.) 2019 *Preliminary Report Akoris 2018*.
- ・ NPO 法人文化遺産の世界 2021 『文化遺産の世界—特集アコリス遺跡が解き明かす古代エジプトの世界—』vol.39